



新年にあたり

日本ボーイスカウト北海道連盟
連盟長 吉田源彦

あけましておめでとうございます。

スカウト諸君も元気で新しい年を迎えたことと思い、うれしいことであります。

この2年間ほどコロナ菌に対応することで思った活動もできず、ふつうの社会生活にも大きな影響を与え、世の中が暗くなってしまうのではないかとも思われましたが、わがスカウトは密を避け、マスクをつけ、手指消毒をするなど、自分でできることは言われなくてもするなど、自分の身を自分で守ることも自然に身についたように思われ、積極的になれたように思います。

疫病にも負けることなく果敢に活動し、家での生活も楽しんでいってほしいと思いますし、君たちが大人になった時には必ずこのことが役に立ってほしいものです。そのことは「そなえよつねに」の精神にも通じるものであります。

今、日本だけでなく世界中でスカウトの数が減っていると聞きますが、スカウトの実力が見えたことがあります。

それは町内会の催しで、子どもたちがお昼の食事を作って食べる行事で、ひと班5人で5班が編成され準備が始まりました。

約1時間半でひと班が食事を始めました。他班はまだごはんが炊き上がらないとか、自分が何をよいかかわからないとかで、2時間過ぎても食事ができない班がいくつもありました。

全部の班が食事も終わり、反省会が開かれたなかで、早々と食事を始めた班に皆の注目が集まりました。

結論は、その中のひとりが現役のボーイスカウトで、仕事の順序、手分けなどを指示し、いっせいに自分の担当にむかい食事作りに動きだしたことがわかり、保護者さんから「ボーイスカウトは順序立てて無駄なく活動するんだ。すごい」と評価され、翌年のスカウト募集時にはその町内会からの入団希望が殺到したのであります。

先人がつないでくれたこの活動は今こそ次の世代へ引き渡していきたいと思えます。

この新しい1年は世界中の人々にとって素晴らしい年になることを期待して新年のご挨拶といたします。

コロナ終息後に向けて

日本ボーイスカウト北海道連盟
理事長 三国久介

あけましておめでとうございます。

コロナウイルスの影響により、スカウト活動が中止や延期となって約2年が過ぎようとしています。又、オミクロン株という新しい変異ウイルスが見つかり、今後どのような展開になるか分からないというのが今の状況です。

その中でも各地区・各団の指導者の皆様方が、様々なコロナ感染対策を行いながらスカウト活動を行い、スカウティングに取り組んでいることに、改めて敬意を表します。

北海道連盟の登録数は、昭和58年をピークに徐々に減少し、現在は10分の1の登録数となってしまいました。時代とともに青少年を取り巻く環境は変化し、私たちは常にその課題と向き合ってきましたが、思うような成果が得られずにいます。各地区・各団毎に課題は様々ですが、組織拡充に向けた新たな取り組みが必要と考えております。

2022年は、日本連盟が創立100周年を迎える年になります。また第18回日本スカウトジャンボリーが東京を主会場として、6ブロックのサテライト会場等、今までのジャンボリーと違い、新型コロナウイルス感染拡大の影響により全国分散型のジャンボリーとして開催されます。北海道連盟では、ジャンボリー期間と同じく真狩野営場を主会場として開催を予定しております。

いずれにしても、我々はスカウトのために、いつでも、どんな時でもボーイスカウト活動ができるように、準備をしておかなければなりません。スカウトのモットーである「そなえよつねに」を心がけておきましょう。

18th
NIPPON
SCOUT JAMBOREE
ALL OVER JAPAN



なんといってもジャンボリー

日本ボーイスカウト北海道連盟
コミッショナー 今 井 建

新年明けましておめでとうございます。

昨年は新型コロナウイルス感染症の影響によりスカウト運動に不自由があったかと思えます。本年もまだコロナが完全に終息したという状態ではありませんが、出来る限りの活動は再開していきたいと思えます。

今年は日本連盟創立100周年を迎えます。数々の行事が予定されていますがその中で今日までの日本のボーイスカウト運動を振り返り、この運動を続けてきていただいた先人の皆さんに感謝する年としたいと思えます。またこれからの100年についても考える年となるものと思われます。

とは言え、今年はなんといってもジャンボリーイヤーです。100周年を迎え東京で行われるジャンボリーにいろいろな期待もあったかと思えますが、今回は分散開催、各ブロックに分かれてのジャンボリーになります。北海道・東北ブロックのサテライト会場は宮城県となりましたが、会場の関係で他県のスカウトは受け入れないということになりました。北海道連盟と致しましては真狩野営場での開催を予定しております。

ジャンボリーに関しましては各地区各隊での開催も可能となっております。4年に1度のジャンボリーですのでそれぞれに合った形でご参加いただければと思えます。

令和4年がスカウト運動にとって素晴らしい年となりますよう、全国で行われるジャンボリーが成功いたしますよう祈念いたしまして年頭のご挨拶とさせていただきます。

令和3(2021)年度第1回ボーイスカウト講習会

2021年11月28日、第1回ボーイスカウト講習会が留萌地区(秩父別町交流会館)で開設されました。

悪天候のためハイキング体験は室内での隊集会形式で行われ、コンパスやゲームなど楽しい雰囲気の中、地域からの参加者7名が修了しました。



第2回ボーイスカウト講習会は2022年1月23日(日)旭川で開設を予定しています。
参加ご希望の方は北海道連盟事務局までお問い合わせください。
または北海道連盟ホームページ事務局ニュースでご確認ください。
1月7日(金)締切です。



新春弥栄

2022 新春 誌上賀詞交換

あけまして
おめでとうございます

北海道連盟 先 達
北海道連盟 顧 問

三浦 武

謹賀新年

北海道連盟副連盟長
北海道スカウトクラブ幹事長
江別第2団ビーバー隊長

大橋 和子

謹賀新年

スカウトの目線で活動しよう！

ボーイスカウト北海道連盟副連盟長
札幌第10団 団委員長

長岡 正彦

あけましておめでとうございます

胆 振 地 区

地区協議会 会 長	滝口 信喜
地区協議会 副 会 長	熊野 正宏
地区委員会 委 員 長	小笠原 貢
室蘭第1団 団 委 員 長	高橋 忠義
登別第1団 団 委 員 長	木原 靖之
伊達第1団 団 委 員 長	辻 正博
苫小牧第2団 団 委 員 長	永井 承邦
コ ミ ッ シ ョ ナ ー	村中 啓子
事 務 長 代 行	小笠原 貢
地 区 会 計	長田 孝子
地 区 監 事	福井 洋幸
地 区 監 事	佐藤 庄吉

新春弥栄！

《道連維持財団への更なるご理解とご支援を》

北海道連盟維持財団 評議員
北海道連盟スカウトクラブ 幹 事
旭川地区協議会元副協議会長

宮内 紀代志

あけましておめでとうございます

石狩地区

地区顧問	大橋 和子
地区顧問	猪股 巖
地区協議会長	佐々木 健三
地区委員長	小林 幸治
地区副委員長	高塚 浄正
地区会計	田中 弘子
地区事務長	喜多 英司
地区監事	桜吉 登美子
地区監事	安和 智恵子
コミッショナー	川越 利朗
副コミッショナー	佐藤 雅秀
副コミッショナー	柴崎 勇人
副コミッショナー	今野 桂子

今年もよろしく

おねがいします



新春弥栄

札幌地区協議会

顧問	藤岡 順正
相談役	北野 義城
地区協議会長	樟本 賢首
(健康安全委員)	
地区副協議会長	北 秀継
(地区副委員長)	
地区委員長	菊地 一泰
地区副委員長	陰能 裕一
(野営場管理運営副委員長)	
指導者養成委員長	阿部 高久
進歩委員長	上原 克己
野営行事委員長	武市 喜博
広報委員長	千葉 邦郎
国際委員長	小原 由美子
財政会計委員長	荻根 沢一也
野営場管理運営委員長	村上 義憲
事務長	小竹 知巳
監事	二木 恒治
監事	野内 吉徳
コミッショナー	扇間 康弘
副コミッショナー	瀧澤 ひろみ
副コミッショナー	武市 喜博
副コミッショナー	上原 克己

謹賀新年

ボーイスカウト北海道連盟監事
札幌第4団 団委員長

北 秀継

明けましておめでとうございます
今年もよろしく願いたします

ボーイスカウト北海道連盟札幌第9団

育成会長	三浦 崇
副育成会長	北野 義城
団委員長	樟本 賢首
副団委員長	北野 和

新春弥栄

留萌地区

留萌第1団 団委員長 櫛井 二三夫
留萌第2団 団委員長 下田 満
秩父別第1団 団委員長 寺迫 公裕
羽幌第2団 団委員長 小寺 克彦
美唄第8団 団委員長 マンフレード
フリデリッヒ
地区協議会長 櫛井 二三夫
地区委員長 寺迫 公裕
地区コミッショナー 小笠原 祐治

謹賀新年

旭川地区協議会

地区顧問 野原 典雄
川村 武雄
森 豊

副協議会長 高橋 明
地区委員長 浅野 玲子
地区副委員長 山口 淳
野行委員長 山口 淳
組織広報委員長 高橋 明
リーダー委員長 杉田 肇
野営場委員長 天満 昇
財政委員長 花田 芳人
会計 高橋 明
事務長 高橋 明
監事 池内 勝

コミッショナー 杉田 肇
副コミッショナー 宮澤 多佳子
副コミッショナー 村上 政義

新春弥栄

日本ボーイスカウト北海道連盟
秩父別第1団 団委員長
寺迫 公裕

新春弥栄

日本ボーイスカウト北海道連盟
釧路第6団

育成会長 菅原 宏樹
団委員長 白浜 正宣
副団委員長 藤田 茂

謹賀新年

日本ボーイスカウト北海道連盟

理事長 **三国 久介**

謹賀新年

スカウトに楽しいプログラムを!

日本ボーイスカウト北海道連盟

副理事長 **下田 好徳**

新春弥栄

日本ボーイスカウト北海道連盟

常任理事 **北野 和**

新春弥栄

日本ボーイスカウト北海道連盟

常任理事 **池田 君松**

新春弥栄

日本ボーイスカウト北海道連盟

常任理事 **野内 吉徳**



昭和34年4月、旭川龍谷高等学校に奉職、丁度60年前になります。

毎週火曜日から土曜日まで、朝の放送礼拝の時、ここに浮かんだひとことを語っていました。その当時の書き散らかした原稿を、同僚が整理して初めはガリ版で、次にワープロ、さらに印刷でとまとめてくれたものが、只今手元に残っています。

昭和38年2月から退職する平成9年3月まで、教育相談と宗教教育の担当であったので、その役目をはたせたといえましょう。

今回、昭和47年4月から昭和62年までの中から少し選んで、小冊子を作成しました。

題字は元同僚で書家の椿澤舜瑩先生に、カットはボーイスカウトのリーダー仲間であり日本画家の千葉さんに、また編集はボーイスカウトの後輩リーダーの協力をいただき、感無量です。

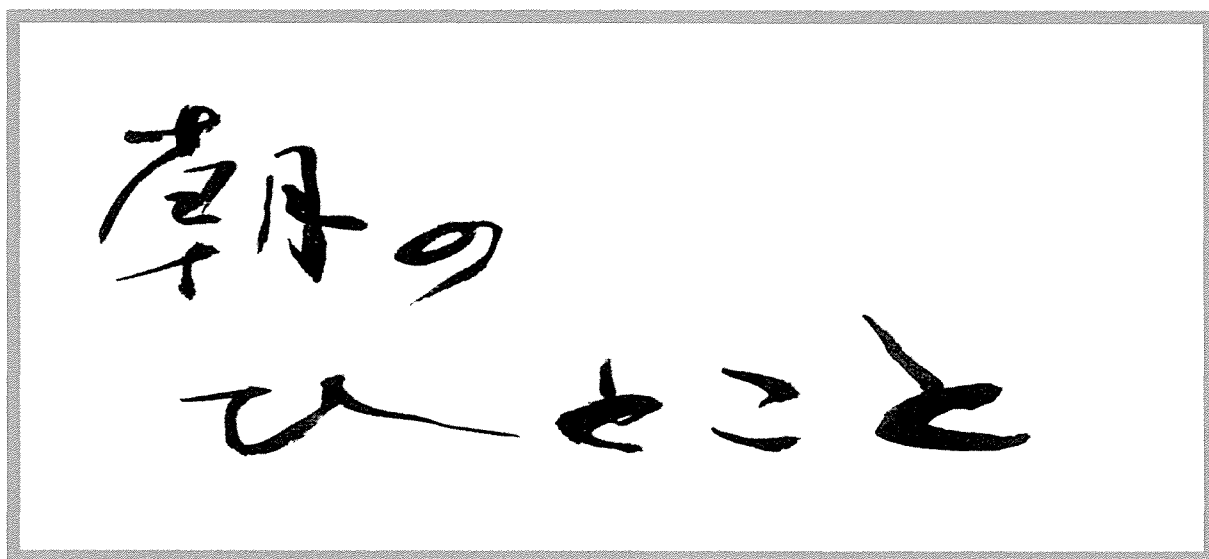
最後に龍谷高校に勤務中の中田、酒井先生の手をわずらわしました。感謝です。

露命わずかに枯れ草の身となっているいま、自分の足跡を少しばかり残すのもよかろうかと、急ぎまとめました

合 掌

令和3年5月

松 倉 信 乗



朝の言葉を毎日端的に生徒たちに判り易く話かけることは大変むずかしいことである。自分の生活を通してのこともあろうし、また学問的なこともあろうし、対象が生徒であるから特に言葉にも注意しなければならない。

相当の勉強をしなければこれは到底出来ないことであろう。

それを松倉君は数年前よりたった一人でやってのけて来た。その努力と精神は敬服に価する大きな仕事だと思う。

これからも自重自愛して前途有為な青少年のために頑張ってもらいたいと思う。

学校長 石田 学 而
「旭川龍谷高等学校 創立者」

美しい言葉は美しい心より生まれる。
しかし、美しい心に仕上がってからでない、
美しい言葉が口をついて出てこないというのでない。
「ありがとう」という言葉を
使っているうちに、
感謝の心も自然に培われていくものだ。

ひと言多かった為に人を傷つけ、
ひと言つけ加えたことによって、
人を和ませる経験をもとう。
言葉は、言霊ともいわれ、
大きな力を宿すものと考えられてきた。
それはまた、言葉の使い方を深く
戒めているともいえる。

一度、投げられた言葉と石は戻らない。
用心しないと
人の心を傷つける言葉を投げってしまう。
一度投げられた言葉と石は戻らない。

仏教では
挨拶の挨拶という言葉は、近づくという意味、
挨拶という言葉は、ひき出すという意味です。
「おはよう」と近づく、
相手も「おはよう」と、
自らの心を開くわけです。
そこに、ほんとうの人間と人間の
ふれあいが、生まれます。

人の悲しみに同情するよりも、
人の喜びを喜んでいくことの方が、
むずかしいと経典にあります。
人の心の複雑さを思い知らされます。

水たまりに自分の輪郭が映る。
風の時にはゆがんで映り、
静かな時には正しく映る。
激情と興奮の中にあっては、
ものはゆがんで見え、
沈着と冷静の中にあっては、
あるがままに見える。

ほほえみのある顔で接すれば、
ほほえみの顔が返ってくる。
思いやりのある言葉で語れば、
思いやりの言葉が返ってくる。
一時の混乱があったとしても、
ほほえみにはほほえみが、
思いやりには思いやりが返ってくる。

設計図をひいたからといって、
家が建つものでありません。
土を掘り、土台を築いていく。
それだけで家が建つものでありません。
その上に順次築いていく。
設計図をひくだけなら、
何もしないのと同じことです。

他人のあやまちは、
小さなことでも
見逃さずに見えるものです。
そして笑うものです。
他人のあやまちを笑える無神経さは、
そのまま自己反省の浅さにつながります。
他人のあやまちの小さなことを
見逃さない目の持主です。
自分に対しても、
その目で見たいものです。

粉雪は
風のとおり道を知らせてくれる。
風の吹くまま粉雪は飛びまわる。
根雪になるとそうでなくなる。
人もまた、
試練の風の吹くままに
吹き動く者もいようが、
その風の中で一歩でも二歩でも
前進する者もいよう。

らかなこと、ゆかいなこと、楽しいこと、
誰でもそうありたいと願うけれど、
つらいこと、苦しいこと、
悲しいことにも遇う。
人が鍛えられ成長するのは、
らかなこと、ゆかいなこと、
楽しいことの中にはない。

一枚の紙をも仏さまからのいただきものだと
大事にされた人の話に
どれほどの人が感動することであろうか。
物を粗末に扱うところは、
物に対してばかりでなく、
そのまま人に対しても
同じ態度になっているのでないか、
ふと心配になる。

張りきった顔もあれば、
暗く沈んだ顔もある。
生き生きした顔もあれば、
無気力な顔もある。
顔は心の門だといわれている。
輝ける顔、
それはあなたの心がけひとつによる。

地図の上でわずか一度見誤っても、
実地に歩くと、1キロで17.50メートルの
誤差となります。
これくらいはよいだろうという
心のゆるみが結果として
大きな苦痛となって返ってきます。

碁や将棋で、
戦局に関係ない碁石や駒はひとつもない。
ひとつ打つ時、それがそのまま全体を生かし、
また、殺すことになる。
将来の自分を知りたければ、
現在の自分を省りみることです。

人間の語る言葉の中で
もっとも美しい言葉は、
いたわりのことばです。
それは、思いやりの深さから、
発するものだからです。

お釈迦さまは、
友人同士の交際はどうすれば
よいか、ということについて、
助け合うこと。
悪口を言わないこと。
お互いのよいところを認め合うこと。
約束を守ること。
だまさないことという、
五つを教えられた。



説明で理解できても、
身についたものでなければ
わかったことになりません。
スキーで、ボーゲンは、
クリスチャニアはと、
連続写真を見せてもらって、
なるほどと頷いても、
わかったことになりません。
何度も何度も繰返しの練習、
そこで身体でおぼえたのが、
わかったということなのです。

オアシスは砂漠の生命です。
それになぞられて、
オは、おはようのオ。
アは、ありがとうのア。
シは、失礼しますのシ。
スは、すみませんのス。と口にしましょう。
命が育っていきます。

がんばりのきく者であってほしい。
しかし
石のにも三年、面壁九年、と
がんばの象徴の如きに受け取られますが、
ただ坐だけでなく、
悟りにつながる坐り方で
なくてはならないのです。

花はひとりで咲きます。
咲く力が、花にあるからです。
同じことが人にもいえます。
自分よりよくしようとする力を、
私共ひとりひとは、もっているのです。

人の悲しみを
わかるものであってほしい。
これは、仏教がとく愛の実践である。

今日一日これといって良いことを
していないと気づいたら、
友のよいところを思ってみよう。
もし、彼が目の前にいたら、
良い点を伝えてあげよう。

わずかな親切な行為と
短いいたわりの言葉で
まわりが明るくなります。

靴の中に、どんな小さな石があっても、
全身に痛みを感じます。
そのように、
肉体の痛みはすぐにわかりますが、
精神が病んでいても気づかない。
あなたの行為はどうだろう。
あなたの言葉はどうだろう。
あなたの心はどうだろう。
身・口・意の三つから、
精神の診断をしてみよう。

ムチとエサでしこまれた動物は、
ムチとエサがなくなれば、
もとの野生にもどります。
人間はそうでないでしょう。

人に左右されない
自分だけの時間をもとう。
能力をみがく
自分だけの時間をもとう。
己をかえりみる
自分だけの時間をもとう

渡り鳥には
決まった渡りの道があると聞く。
飛行機には飛行機の道が、
船には船の道が、
車には車の道がある。
人には人の道がある。
人のゆく道があり、
人のあるべき道がある。

一輪ざしに
一輪の花が咲いてある。
ただ、それだけで部屋は明るい。
一輪ざしに花を咲けようとする心と、
それを、美しいと眺める心が、
そこにあるからです。

音楽の三要素、
それは、リズムとメロディと、
ハーモニーです。
それは、音楽の世界だけにいえることでない。
私共の生活そのものにもいえる。
生活のリズムを乱しては、
生活のメロディをにごらせては、
生活のハーモニーをこわしては
生活のそのものが、成り立たないのです。

闇を好む者はいない。
ひとすじの光を求む。
人間の自然の姿です。

大きな石につまづくことはない。
小さな石につまづくのだ。

ほかの鎖がどれほど強くても、
一ヶ所弱いところがあれば、
全体は
弱いものになってしまう。

たおれても、なお、
光を求めて咲いているダリアの姿を見る。
ただ一筋に咲く、そこに頭が下がる。

堤防に
ほんのわずかの弱いところがあっても
そこから決壊するように
ちょっとした行為が
大きな報いとなるものです。

目標のない生活は
カジのない船に似ています。
ただ、波にただよっているだけです。

寒さから身を守るために
オーバーを着る。
怠惰と誘惑と悪事から
身を守るために
何をしているであろう

口は災いのもとです。
考えもなく動かしていると、
他人のうわさや、中傷や批難に終始します。
そのような自分であると気づいたら、
せめて、他人のよいところを見つけだし、
ほめてあげよう。

インクを一滴、水に落とすと、
すぐに拡散する。
その様子そのまま心の
よごれていく速さだと
知ればよい。

熱帯魚を育てる水槽に
泳いでいる金魚は、
何と大きなことか。
湧き水で育つ金魚は、
成長はおそいが、
色は一段と鮮やかである。

米を作るには八十八の手がかかる。
だから八十八と書いて米という。
親はそう言って、
お米一粒も
粗末にはならぬと教える。
遠い古い話である。

結果よりも
過程そのものを重要視したい。
釈尊も、怠らず努力せよと
言い残しているでないか。

人の悲しみがわからない時は、
自己中心的な状態であるといえます。
人の悲しみがわかる時は
仏のこころの育っている証拠といえます。

石の上にも三年という格言がある。
ダルマ大師は、面壁九年座したという。
人が人になるために、
三年や八年のきびしさは必要である。

逆境こそ
天の恩寵だと
奮起一番忍耐することです。

評論家の江藤淳氏が言う。
任務を忠実に果たして三十年、
小野田さんのような顔の人は、
今頃見あたらない。
人間は誰でも三十年、
生命がけで事にあたると
まちがえなく、
一つの顔が出来る。

怒りの顔より
笑顔の方が、
とげのある言葉より
思いやりのある言葉の方が、
無視した態度より
いたわりの態度の方が、
どんなにか人は喜ぶだろう。
ちょっとしたこころの向け方で、
怒りの顔を
笑顔にかえさせる。

私達は目に見えるものに敏感であるが、
目に見えないものに鈍感である。
愛、ご恩、友情、お陰、信頼、ご縁、
みな目に見えないが
それらによって生きている。

「友」という文字の語源を調べると、
手という文字を
二つ重ねあったものだそうです。
手をとりあって
語り合える友がいなかったら、
温かい体温の通じあう
友の言葉を聞かれなかったら、
どんなにか淋しいことでしょう。

毎日の生活が、そのまま言葉に現れます。
生活が乱れていると言葉も乱れます。
生活が落ち着いていると、
言葉も安定しています。

毎日の生活がそのまま顔に現れます。
生活がすすんでくると、
顔はくもりだします。
生活が充実していると、
顔は輝いてきます。

毎日の生活がそのまま姿に現れます。
生活が落ち着いていないと、
姿はかげをもちます。
生活が落ち着いていると、
姿は美しいのです。

人を高めるひとこと
人をがくひとこと
ひとを励ますひとこと
ひとことの意義
ひとことの重み
せめて一日に一度なりとも
ひかりあるひとことを唇に

私の悲しみに同情してくれても、
この私に代わってくれる者はいない。
この私を大事にいたわってごう。

この世の中で、一番淋しい言葉は、
「あの時もっと努力すればよかった。」という
言葉であろう。

本気になる本ものになる。
しかし、
本気にならずして
本ものになろうとするものは多い。

カンナの花がひとつ
大きな花を咲かせました。
それを見ていると、
すべての力を
花を咲かせることに
投入しているように思えてなりません。
ところで、
私達も一日一日に
ひとつひとつの花を咲かせるよう
全力投球しているだろうか。

「ありがとう」のひとこと
素直な心で自然に口に出る。
大きな成長を意味します。

「すみません」のひとこと
素直な心で自然に口に出る。
精神の健康なあかしです。

きたない環境であるのは、
きたない人がいるからだ。
美しい環境であるのは、
美しい人がいるからだ。
人は環境を作る。
そして環境は人を作る。



いつまでも
過去の思いにひたっている。
それは、
今の自分を
大切にしていないことになる。
いつも
未来の夢ばかりを追っている。
それも、
今の自分を
大切にしていないことになる。

成功とか失敗とかを
事の終わった評価と考える。
しかし、終りでなく、
初めとした方がわかりいい気もある。
思いきって精一杯、第一歩を踏み出す、
それが成功といえよう。
いやいや、だらだら、
それでも一歩を踏み出す、
それが失敗といえよう。

身体の調子がおかしくなると
脈拍もおかしくなる。
精神の調子がおかしくなると
言葉もおかしくなる。
言葉は、精神の脈拍といえよう。
男子には、男子の言葉がある。
女子には、女子の言葉がある。
目上の人には、
目上の人への言葉がある。

「時を無駄に過ごす」
「生命を粗末にする」
同じことです。

人をあざむいても
自分自身を
あざむくことは出来ません。
あざむくことの出来ない自分を、
大事にいたわっていきたいものです。

掃除ひとつも修行です。
手だけですのでない。
身体全体です。
愚かものの代表の仏弟子チューラパンダカも、
掃除ひとつで悟りを開いた。
掃除ひとつも修行です。

めしはくうものでない。
ご飯はいただくものです。
めしはくうものと、
ご飯はいただくものとの
決定的な違いは、
感謝のこころのある、なしです。

心は自由自在に動きます
怠け心ともなります
勤勉な心ともなります
みにくい心ともなります
美しい心ともなります
心は文字のとおり自由自在に動きます。
だから、
しっかりきたえねばなりません。
しっかり見つめねばなりません。

他人をごまかせても
自分をごまかしえるものでない
《ごまかさない》それが
種子となり花が咲き、
やがて実を結ぶ

最小の努力で
最大の成果をあげるのは
工場の機械です。
しかし、
最少の成果にも
最大の努力をするのは人間です。

水の流れは 目に見えるが
時の流れは 目に見えない
だから
つい空しく過ごしやすい

願いが
願いどおりにならない時もあるが、
だからといって
願いを捨てたところに
どんな生き方があろうか

川の流れの止まるところを
よどみという。
よどみはやがて悪臭を放つ。
川の流れが続く限り
よどみのできることはない

踏まれても刈られても
なお生い茂る
雑草の強さに学ぼう。
そっと咲いた一輪の花の
清らかさに学ぼう

三段跳びは、
ホップ、
ステップ、
ジャンプです。
ホップ、ステップなしの
ジャンプは望めないでしょう



「もう一步」
このかけ声を
自らにかけていこう。

掃いても掃いても
落ち葉が落ちる。
やめてみたらどうなるだろう。
ただ掃いていくばかり

失敗しそうだと思うその時から、
失敗に向かって歩むようだ。
成功しそうだと思うその時から、
成功に向かって進むようだ。
思う一念、そこにカギがあるようだ。

ひとことが言えなくて気まずい思いをする。
ひとことを言ったために
温かな関係が成り立つ。
ひとこと、その代表は
「ありがとう」「すみません」である。

身体で覚えたことは忘れない。
頭で覚えたことは忘れやすい。
身体に刻みつけるように
汗を流してみることだ。

人は誰でも、
まず自分を一番いとおしいと
自分を守るでしょう。
他の人も又これと同じです。

一日二十四時間の持ち時間は、皆、同じだ。
問題は
その時間をいかに使うかである。

話す時には、
話すことに心をこめる。
聞く時には、
聞くことに心をこめる。
考える時間には、
考えることに心をこめる。
心をこめる、このことに心がけよう。

ひとつの言葉で人を傷つけ
ひとつの言葉で人を和ませる
ひとつの言葉で人を苦しめ
ひとつの言葉で人をいやす

ブレーキのきかない車は
危険であるように、
自分をコントロール出来ない人は
心配なことです。

云う口より
聞く耳を
大事に育てたい。
すなおな心でないと
よく聞けないでしょう。

つらいところを
日常化していくか
楽なところを
日常化していくか
どこに君の基準をおいていくか

花が咲くまでに
一日の休みもない
一ときの休みもない

人間だけが鏡をもつ。
それに我が身を写してみよう。
人間だけが教えをもつ。
それに我が心を写してみよう。

人が成長するために、
体から汗を流すことは必要です。
心からも汗を流すことは必要です。
体からの汗は、
激しいトレーニングからですし、
心からの汗は、苦しい悩みからでしょう。
共に人の成長の宝です。

「もう少し」は、努力する時のかけ声、
「これくらい」は、怠ける時のつぶやき、
「もう少し」は、向上に通じ、
「これくらい」は墮落に至る。

初中終と書いて、
「しょっちゅう」と読む。
初めもよく、中もよく、
終わりもよくあれと、
伝道にたつ弟子に向かって
語った釈尊の言葉から出来たものである。

すぎ去った過去にひきずられるな
まだ来ない未来に心うばわれるな
確かな現在に確かな歩みをする。

心のチャンネルの切りかえを
すばやく
そのことひとつの
実行を心がけたい。

信頼は、その人の言葉と
行為と心のありようによって
生まれもしくずれもする。

ものごとを成しとげるために
しんぼうしなければならぬ。
「石の上にも三年」とあるように、
少なくとも、それだけは必要なのでしょう。

高いところに目標をおくと
励みにも力が入る。
低いところに目標をおくと、
励みに力が入らない。
目標がない、
これは問題外です。

人の見ているところで人であること
それはあたりまえのことです。
人の見ているところで人でないこと、
それは下等です。
人の見ていないところで人であること、
それは上等です。

天につばすれば自らにもどる。
自らの行為の報いは、すべて自ら
受けざるをえない。

浅い川は音をたてて流れ、
深い川は静かに流れる。
下等の人間は丁度、浅い川のように
上等な人間は丁度、深い川のように

心構えはそのまま面構えとなる。
面構えは心そのままを現す。
いい顔をしている。
いい心構えである。

時間そのものは限りなくある。
しかし、
私の時間には限りがある。
私の時間を大事にしたい。

聞く耳をもたない者でも、
言う口をもつ者の何と多いことか。
耳と口は一對です。

荒地だと木は枯れる。
急な寒さに木は枯れる。
水がないと木は枯れる。
学ぶ意欲を失うと
人間は枯れる。

寒暖の差が激しいほど、
紅葉は美しい。
人間もきびしさに耐えられれば、
なおのこと輝きを増す。

あと一步、
その一步に歯をくいしばる。
もう一步、
その一步へと踏みこんでいく。

けものにはけもの通る道がある。
本能のおもむくままに、
動くところの道である、
人間には人間の歩む道がある。
耐えて
切り開くところに道ができる。

すぐれた人と同じ生き方は
できないまでも、
すぐれた人の言いし言葉を
繰返し繰返しまねて語ろう。
少しはすぐれた人に近づくであろう。

山のように どっしりと
鳥のように 軽やかに
空のように 澄みきって
雲のように 自由自在に
そういう人間をめざしたい

「時間がない」と答える。
時間がないからでない。
生みだそうとしないだけだ。
「出来ない」と答える。
出来ないのではない。
やろうとしないからだ。

生活にはリズムがある。
それにのるかのかのらないかは、
自らの努力にかかっている。

生命
それは、自ら作りだしたものでない。
生命
その尊さを守っていこう。

造花と生花の
区別も出来ない目になっては
閉じているのと同じこと。
よく見ることの大切さを、
よく見る
よく見る
呪文のようにいつも称えていよう。

聞く耳をもたない者は
不幸の始まり。
よく聞く、よく聞く、
呪文のように称えていよう。

枯木に水を与えても
肥料を与えても
日の光をあてても
枯木はそのままである。
自らを枯木にすることはない。

自分の目は二つであるが、
自分を見る目は無数である。
ごまかしは出来ない。

ただ 何となく座っていて
ただ 何となく見つめていて
ただ 何となく時が過ぎる。
そこに安住している自分に
思いっきり活を入れる。

静かに
我が身をふりかえる、
そのような時を
一日一度はもちたいものだ。

水鳥が涼しそうに
水面を静かに動いているが、
水中の足はたえず動いていると聞く。
水鳥でさえそうだとすれば、
人間はなおのこと、
努力せずにおれないものだ。

今が本番
今日が本番
その思いでのぞむ。

怠けることは楽だけど
あとの結果を考えると恐ろしい。
励むことはつらいけど
あとの結果を考えると楽しいものだ。



生きることは選ぶことです。
これにしようか、あれにしようか
やろうか、やめようか
生きることは選ぶことです。
そして、
学ぶことは
よく選ぶためにあるのです。

人間が
この世に誕生以来の
すべての生命を受けとっているのが
今の自分。
だから自分ひとりの生命ではない。
多くの生命に支えられているのが、
今の自分。
だから自分ひとりの生命ではない。

鏡にうつっている姿を
自分とは知らず、
攻撃する小鳥を見て、
畜生の本質を知る。
自ら省みることを
忘れていた者を畜生という。

じっと待つ心
じっと耐える力
じっと見とおす目
じっと
じっと
じっと
智慧ある者なれ

寒い日には
寒い日の過ごし方がある。
雪の日には
雪の日の過ごし方がある。
天に向かって
不平をいってもどうにもならぬ。
寒い日には寒い日の、
雪の日には雪の日の、
過ごし方を創っていく。

屈強な人が走る。
ひよわな人が走る。
差は歴然とするが、
走り続ける限りともにゴールに至る

初めての道は遠く
二度目の道は近い。
初めての道は辛く
二度目の道は楽だ
初めにすべての力を。

花は光を求め
光に咲く。
人間も光を求め
光にやすらぐ

しずかに目をとじる。
昨日の生活をおってみる。
しずかに目をあける。
今日一日にかけてみる。

一番苦しいことをあとまわしにせず、
一番苦しいことを先にする。
一番いやなことをあとまわしにせず、
一番いやなことを先にする。
楽なこと、好きなことを先にするから、
苦しいこと、いやなことが
なお苦しくいやになる。

楽なことに目が向き始める。
その時から墮落が始まる。
つらいことに目が向いていく。
その時から、
向上へ出発し始める。

少しのころのゆるみが
大きな負い目を負うことになる。
ちょうど
坂道をころがる岩のように
危険きわまりない。

横着になると
人の話は聞こえない。
謙虚でいると
人の話は聞こえてくる。
聞けないところに問題がおこり、
聞けているところに問題は起こらない。

木陰は涼しいが、
多分木は暑いでしょう。
何の心配もなく生活出来るものも
多分どこかでごんばっている人が
いるからでしょう。

ちょっと油断していたら
畑は雑草で一杯になっていた。
ちょっと油断していたら
ここは貧しくなっていた。

坐る姿勢をととのえたい。
下腹に力をいれ、あごをひき
野に咲くユリのあの形ににせて
坐る姿勢をととのえたい。

どこに行こうとしているのか。
めあてはあるのか。
あてどもなく歩くだけでは
あまりにも一日が無駄でないのか。
どこに行こうとしているのか。
めあてはあるのか。

感情のおもむくままに
行動することはやさしい。
感情をコントロールしながら
行動することはむずかしい。
しかし、人間になる道だ。
むずかしいところに挑戦する。

素直な心で「ありがとう」と口にしてみよう。
ありえないことが、今、おこったという
それが「ありがとう」の意味なのだ。
素直な心で「ありがとう」と口にしてみよう

素直な心で
「お陰さま」と口にしてみよう。
見えないところで
この私を支え続けに支えている、
それが「お陰さま」の意味なのだ。
素直な心で
「お陰さま」と口にしてみよう。



素直な心で

「もったいない」と口にしてみよう。
たとえ屑でも活かし方によって生きる。
それがもったいないの意味なのだ。

素直な心で

「もったいない」と口にしてみよう。

「迷うもの 道を聞かず」ということばあり。
道がわからなければ、
素直に聞くとよいのに、
ひとりよがりの判断をするから、
迷うのである。

「迷うもの 道を開かず」ということばあり。

言葉の乱れは心の乱れ

言葉を正すは心をととのえる。

樹氷の美しさは

息づいていることのアカシである。
枯木では、樹氷にならない

美しい言葉を使おう。

美しい人になるために。

心あたたまる言葉を使おう。

心あたたまる人になるために。

言葉は人を育てます。

あたたかなところにあたたかな木が育つ。

成長は早い材質は柔らかだ。

寒いところに寒い木が育つ。

成長は遅い材質はかたい。

きびしい自然はやわらかなものを
かたく変える。

「きびしさ」を自分に課していく。

後のことを考えず今の時をすごす。

イソップ物語のギリギリスのようなものだ。

後のことを考えて今の時をすごす。

イソップ物語のアリのようなものだ。

ものに明るい面があります。

暗い面もあります。

明るい面のみを見る人を楽天主義者といいます。

暗い面のみ見る人を悲観論者といいます。

明るい面も暗い面も

ありのままに見つめ

その上で暗い面を明るい面にかえていくのを
智慧ある人といいます。

紙でも手を切るように

ささいな行為で身を切ることもある。

この道を歩く

どこまでも歩く

この道を信じて今の今を歩く

ひとりで歩いているつもりでも

多くの人の後押しがある。

それは両親であり友人であり

見ず知らない人であったりする。

ひとりで歩いているつもりでも

多くの人の後押しを感じていくことを

「恩」という。

鮭が川をのぼっていく姿をみた。

高い堰堤を何度も、何度も

登ろうとしている。すごい力だ。

思わず、がんばれと叫びたくなる。

しかし、ほとんどが不可能である。

それにもかかわらず繰り返す。

うろこがはがれた無残な姿になっても。

すぐにあきてしまうものに、

大きな教訓を与えてくれる。

一生懸命励んでも

思うようにものごとはなしえない。

まして

何の励みもせずに

どうしてもものごとはなしえよう。

心地よい言葉は、すぐに聞けても

きびしい忠告はなかなか聞けない

しかし

きびしい忠告は

時には、

成長への大きな刺激となるものだが。

激しい川の石は

とがったものでもまるくなる。

そのように

人はきたえられれば

きたえられるほど

謙虚になる。

「心」のありようを、経典には、
「動物園の猿のように
片時もじっとしていない」と
説かれている。
それだけに気をゆるめると、
心はすぐに暴走します。
それをコントロールすることは、
なかなかむずかしいが、
人間の証としてこの一点だけは、
守り続けたい。

対岸の火事を見るような
気分であるものは戒めよ。
その火の粉は
やがて我が身に
ふりかかるであろうから。



この世の中に、ただひとりしかいない私。
それ故
悪に結びつけることのないように。

全体はひとりから成り立ち
ひとりを除いて全体は成り立たない。
ひとりのわがままは
全体を乱し
全体の動揺はひとりを苦しめる。

太陽の光をすべて受けて
花は咲き実をつける。
すべての人の恩恵のもと
人は人となっていく。

暗い気持ちのとき、
雨の日はその気持ちを倍加させ
明るい気持ちのとき、
雨の日でもその気持ちのままとなる。
暗い気持ちのとき、
晴れた日でもその気持ちのままであり、
明るい気持ちのとき、
晴れた日はその気持ちを倍加させる。
心ひとつの働きで
どのようにも変わるとしたら、
心をきたえる努力は、
怠ってはならない。

ゴミや砂は、
強い風に舞い上がる。
堅い土や大きな石は、
強い風にも動かない。
人間にも二通りあろうか。

心は見ることも出来ないが
形となってあらわれる。
動揺し、反発し、怠惰であると
だれにでもわかる姿をとる。
落ち着いて従順で努力していると
だれにでもわかる姿をとる。
形は心のあらわれである。

犬にも猫にも誕生はあるけれど
人間のように祝うことはない。
犬にも猫にも亡くなる日はあるけれど
人間のように葬むることはない
祝うところ、葬むるところ、
そのころの誕生も、
人間にしかない。
明日はお釈迦さまの誕生を
お祝いする花まつりです。

ころは見えないけれど
言葉や姿となって
現われる。
ころをきたえるのは、
言葉を正すこと、
姿をととのえること、
それ以外に道はない。

恥を知る
人間のあかし
恥を知らぬ
畜生のしるし
わがころに照らして
いずれかを問え

太陽の光がレンズを通ると、
ものがすべて燃えるとは限らない。
一点に集まるかどうかだ。
同じように一点への思い、
それが、大きな力を生みだす。

心を写し出す鏡があったら、どうだろう。
よこしまな思いが写し出される。
人への憎しみが写し出される。
よからぬ考えが写し出される。
まだまだ限りなく
とどまることなく写し出される。
はずかしさはその鏡をもつ人にのみ
言えることだろう。

雑草はのびないうちに刈り取るとよい。
長くのびすぎてしまうと、
倍の労力を必要とする。
心にはえる雑草、むさぼり、
怒り、正しくない考え
そのような雑草の芽が出たら、
すぐつまみとることだ。

今日という日は二度とない。
それこそすっかり過ごせない。

列車には行き先が明示してある。
バスにも行き先が明示してある。
あなたの行き先はどこ？

一日二十四時間であるが、
怠けると十分の一にもならず
励むと倍ともなる。
怠けるか、励むか、
その人の姿勢で
この妙な算術が成り立つ。
一年といわない。
一ヶ月といわない。
わずか一週間と限ってみても
怠ける者と励む者
大きな差が生まれることがわかるだろう。

荒地にはそこに耐える木がはえ、
肥沃な土地にはそこを好む木がはえる。
木は土地を選ぶ
人は友を選ぶ

いつの間にか
夏から秋に変わっている。
この日から秋になったのではなく、
少しずつ変わっていく。
人間もよくなるも、わるくなるも、
少しずつ変わる。

挨拶という文字は、
近よって言葉をかけるという意味だ。
朝の「おはよう」
夕べの「さよなら」
そのひとことを
お互いにひびき合わそう。

喧騒は人の心をあらだてる
静寂は人の心をなごませる。
ひとときの静寂を楽しもう。

昨日の生活がそのまま
続いて今日となる。
するとそのまま続いて
明日になってしまう。
自分に気合を入れる。
だらだらの自分をぶった斬ることだ。

目をとじて、自分の内側を鋭く見よう。
そこに
ずる賢いキツネはいないか
片時も落ち着かない猿はいないか
すぐに攻撃を加えるトラはいないか
目をとじて、自分の内側を鋭く見よう。

一步のあゆみも
頭で考えているだけでもダメ。
確実に足を一步出さなくては。
一步あゆめば
目的に一步近づく。

狼の世界に育てば
人の子も狼となる。
ホントの話だ。
人の世界にあっても
人になるための学習を捨てれば、
動物になる。恐ろしいことだ。

相手のところを開くひとこと
相手のところを支えるひとこと
このひとことを心がけよう。

今日のつとめは
今日のうちに
明日にのばさず
今日のつとめは
今日のうちに。
その思いを今日に打ち込む。

努力をしても
失敗することもある。
努力をしなければ
成功することはない。
努力はするものだ。

苦しいことはつらいにちがいない
苦しいことのないことも
つらいにちがいない。

丁度
塩のほとほどが、
砂糖の甘味を増すように、
苦しいことは、つらいにちがいないが、
苦しいことに耐えてこそ
人生の深みをつけよう。

自分にとって、
うれしい思いは
きっと他の人にも同じ思いとなろう。
自分にとって、
不愉快な思いは
きっと他の人にも同じ思いとなろう。
他の人を
不愉快な思いにさせてはならない。

言葉は心のあらわれ
心が荒れると乱れた言葉となる
心が豊かだと美しい言葉となる
見えない心も言葉で見える。

苗木に支えが必要だ。
しかし、いつまでも
支えを必要としない。
大地に根をはれば、
支えをはずされても
天に向かって、ぐんぐんのびる。
人間にもいえることだ。

怒りのところが
人を鬼に変える。
腹立ちのところが
人を鬼に変える。
妬みのところが
人を鬼に変える。
鬼にならないように
こころを清く保つ。
このことは、苦しいけれど大事な修行だ。

暗い面を見るより
明るい面を見よう。
短所を探すより
長所を探そう。
絶望の中にいるより
希望に生きよう。
心の視点をかえるだけで
暗い中に、明るさは拡がる。

目に見えないところで
つながっているのは、
つくしんぼうだけではない。
一つ一つ独立しているつもりでも
一本の根によってつながっている。
私達一人一人の独立も、
目に見えない
大きな力によってであるといっても
不思議でなからう。

種子も
耕された土地の中で、
肥料を与え、水を与え、
人の汗を加えてこそ
実りある収穫となろう。
努力のないところに
何が生まれようか。



三十秒の遅刻、
発車した汽車に
乗ることは出来ない。
三十秒、一分と
アッという間の時間だけれど
重い意味をもつものだ。

私達の行為に
絶対の正しさはないだろう。
どこかに誤りがあり
どこかで他人を傷つけていることもある。
だからこそ許し合いも成り立とう。
私達の行為に
絶対の正しさはないだろう。

千円を
一万円の十分の一と受けとると、
百円の十倍と受けとると、
そのところに大きなひらきがある。
前者から、不平、不満の音がもれ
後者から、感謝の音がもれてくる。

大切な人から
いただいたものは
大切にする。
一番大切な人は、
親からいただいたもの
それは生命。

すぎ去った過去に
思いをいたさず
まだ来ない未来に
思いをいたさず
ただ 今ある現在に
力をこめよ。

野に咲く花のように
飾ることもなく
自然のままに精一杯、
それが一番美しい。

人を攻撃するその鋭さを
自らに向ける。
きびしいことであるけれど
人となるための
超えなければならぬ道なのだ。

英語の私「I」は、どこにあっても
大文字です。
世界でたったひとり、
外に、代わる者がいないから
大文字なのでしょう。

「只今」とは、禅の言葉
それは、今日することを明日に延ばそう
そう思う時から
今日はずれる。
それを食い止める言葉。

「只今」とは、禅の言葉
それは過ぎ去った過去、
まだ来ない未来に思いわずらわず
ただ確かな現在を生きよという言葉。

「只今」とは、禅の言葉
昭和五十九年十月十二日
この日を二度とは通れまい。
うっかり過ごさせてなるものか
それを知らせる言葉。

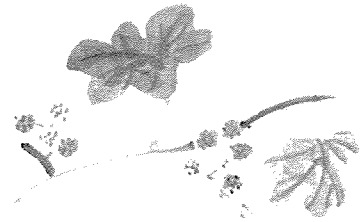
十月十二日

ゴミが風に舞って散らかる
拾う人が出てくるまで
ゴミはその場に居続ける。

騒音の中にいると
それになれてくる。
しかし、静寂を一度味わったものに
騒音は苦痛である。
静寂の中にいると自分がみえてくる。

音もなく雪が降ってくる。
天のどこからくるのか
静かな雪の舞いである。
すべては、天の恵みだろう。

食事をいただく
それを、あたりまえと思う人は多い。
アジアのどこかで、
アフリカのどこかで
一時間に千五百人が、
餓死しているといわれるのに。
食べることはあたりまえ。
それをこえて
ありがたいと思う
世界に生きる。



朝、目がさめても あたりまえ、
歩いて、動きまわるのも あたりまえ
だが、
目の見えない人もいる。
足の不自由な人もいる。
目が見えるということに、
足が動くということに、
あたりまえをこえて
ありがたいと思う世界を感じる。

生まれたことは、あたりまえ
生きていることもあたりまえ と
思っている者は多いだろう。
両親がいる、そのまた両親がいる。
二十五代さかのぼると
三千三百五十五万人いることになる。
その中のひとりでも欠けると
今の私は生まれまい。
それでも
生まれることは あたりまえ
生きていることも
あたりまえといえるだろうか。

心は見えない部分だから
心をみがくてだてを知らない。
だが、
言葉は心の脈拍だから
心をみがくひとつのてだては、
言葉を正しく使うこと。
感謝のこころを現す「ありがとう」
謝罪のこころを現す「すみません」
そのひとことを
心して口にしてみよう。
それがまちがえなく心をみがく
ひとつの道だ

人だけが鏡をもつ。
鏡に写る姿に一喜一憂する。
こころを写す鏡もある。
仏の教えが、それである。

今日という日を何のなすすべもなく
逃してしまったら
それは人生から一日を引いたというような
単純な引き算とはならないものです。
今日という日は、今日という日で
絶対の価値があるのです。

トド松の
天をさす姿に似せて
自らの姿勢を整えよ。

這い松の
強風の只中でも、
地面に
這いつくばる
その姿を思い浮かべて
自らの弱さをはじる。

柔道とか剣道
華道とか茶道
「道」とつく、この国の習い事は、
すべて形から入る。
形から入って、
それがととのった心につながる。
心をととのえる第一は形をつくることだ。

幼な子が歩けるまでに
幾度ころんだであろう。
歩き始めてからでも
幾度ころんだであろう。
その時々
自分で立ちあがり歩きだす。
ころんだから自ら立ちあがり、
歩きだすのだ。

「忙しい」とは
「こころを亡ぼす」と書きます。
こころと身体、この一対にて、
人間はなりたつ。
こころを欠いたところに、
人間はいない。
「忙しい」とは「こころ亡ぼす」と書く。

こころは動いてやまないもの
よくも悪くも変わるもの
このこころを見つめる、
この静かなひとときを大事にしたい。

あやまりは、
人間につきもの
あやまりを認める勇氣と
あやまる素直さ
それは人間の道

口は二つの働きをする
食べることと、しゃべること
二つの働きをするのに、ひとつ。
耳は、聞く、ただこのひとつの
ためにふたつある。
話すことのやさしさと
聞くことのむずかしさを
身体は示しているのだろうか。

会う日に別れの日がきざまれる。
生まれる日に、死ぬ日がきざまれる。
喜びの日に、悲しみの日がきざまれる。
これらすべて、正しい理^{ことわり}といえる。

ひとことの言葉で
人は傷つき
ひとことの言葉で
人の傷はいやされる。
たったひとことの言葉で
人を生かしも
人を殺しもする。
ひとことに注意する。

マラソンは42km、
ゴールを目ざし選手はひた走る。
ところで、
ゴールがないとすれば
そのように
走れるだろうか。
そのことから
目標をもたないことの
恐ろしさを知ろう。

わずかな土を見つけて
雑草は根をおろす。
そのたくましさ。
岩間に根づいた松の根で
岩でも割れると聞く。
そのたくましさ、
そのたくましさに学ぼう。

大きな岩が
微動だにしないように、
まず自らを
それに似せたい。

ご飯を
食う、
食べる、
いただくの三つの段階がある。
「食う」は動物、
「食べる」は人間、
しかし
「いただく」は
真の人間となる人間の作法である。

外を飾るを愚かといひ
ウチを飾るを賢いという。
だが、
外を飾る人は多く、
内を飾る人は少ない。
内から外ににじみでる
そこに
かわらぬ美しさがある。

思いやりのところが、思いやりの言葉となる。
怒りのところが、怒りの言葉となる。
ところと言葉は、ひとつ。

動くものの中にあつて、
動かないものがある。
天体の北極星である。
それあるが故に、航海の時の位置も
確認されよう。
動くものには、動かないものから
目を離さないことだ。

動くものの中にあつて
動かないもののあるは、しあわせ。
動くものは、人間
動かないものは、仏の教え
動くものの中にあつて
動かないもののあるは、尊し。

一日一時間を生みだすと、
一年で三百六十五時間にもなる。
一日一時間でも有意義に使うと、
一年で三百六十五時間
実あるものを得る。
一日一時間ぐらゐと無駄に過ごすと、
一年でなんと三百六十五時間もの
無駄使いとなる。

一秒でも
百メートル競争で縮めるために
死闘をくりかえす。
一秒でも遅れると汽車に乗れない。
一秒といえども
それだけの重みをもつ。

過去は
過ぎ去つた時間。
未来は
未だ来ない時間。
現在、
確かなところは
「只今」のこの時間。

大地にしっかり根づく
木々に同じく
まず自らの足元からととのえよう。



大きな山にくらべると
ちっぽけな自分です。
広い空にくらべると
心狭い自分です。
でも
あの山のような、
あの空のような、
心でありたい。

飼われている鳥は自ら餌を
さがす力をなくしてしまうと言われる。
保護されすぎると
人もまた同じことです。

線路には切り換えがある。
それによって方向が変わる。
生活にも切り換えがほしい。
切り換えには、思い切りが必要である。

節度もなく慢然と生活していると、
そのとおりの顔となる。
けじめのある生活をこころがけると、
深みのある顔となる。
顔はその人の生活の蓄積である。

菊は秋の最後を飾るごとく
咲いている。
吉川英治の句に
「菊作り 菊見る人は 陰の人」とある。
美しい菊には、丹精こめて育てた人が
その背後にいるのである。

聞く、しっかり聞く
身体全体を耳にして聞く。
そうすると聞いた言葉は
生命となって、
その人の中に生き続け力となってくる。

車のブレーキに故障があつては
暴走を止められない。
心のブレーキに故障があつては
人の暴走を止められない。
車は整備によって、
心は正しい教えによって
ブレーキの役目がはたされる。

人を足げにして
自分の幸せのみ追求していく姿を
畜生と言ひ、餓鬼と言ひ、
その行く先を地獄と言う。
そこにはほんとうの幸せはないと
鋭く指摘したのがお釈迦さまでした。

手を合わす
たったひとつの行為だけれど
心静まるその中に。
己の姿を見つめます。

人を責めるは やさしく
自らを かばうもやさしい。
人をかばうは むずかしく
自らを責めるも またむずかしい。

善財童子の像は、
走りながらも
手を合わせている姿を表している。
自らを省りみる
合掌の世界を捨てて
走りっぱなしは恐ろしい。

真珠も
きびしい冬の海で
一層光沢をますという。
人も
投げださずに
じっと耐えることで
みがかれぬいた美しさを
身につける。

天からの贈りものは
時には雨であり、
時には雪である。
それが氷蒸気となって
天に帰り、
暑ければ 雨となり、
寒ければ 雪となる。
ひと^{しづく}滴の水も
ひとつながりとなって
天と地を往復している。
ひとりの人もこれに似て
多くの人とつながりをもち、
関係のない人などひとりもいない。

人の失敗を笑うは見苦しい。
失敗しない人はいない。
励ますことこそ人の道でないか。

五重の塔の最上部に
みごとな彫りで飾られた
水煙というものがある。
それは塔を作る中で
一番手をかけ手のこんだものである。
ところが、地上からだ
勿論その彫り物は見えない。
目に見えるところだけ、手をかける。
目に見えないところは、手を抜く。
これが我々の姿だといえるが、
塔における水煙は
その逆を示している。

なれが一番禁物だ。
心のどこかにスキが出来る。
スキからいろいろ入りこむ。
なれが一番禁物だ。

日々出会う
なんでもないあたりまえの人を
ひそかに拝めるような
人になりたい

無視される者の淋しさ、
無視する者への怒り、
ともどもの
苦しさを思う時、
まず近づいてひとこと
「お元気ですか」と
言葉を交わしてみよう。

コツコツと
穴を掘っていくと、まちがいなく
地下水に達する。
コツコツと
ひとつのことに打ちこめば、まちがいなく
花は咲く。

自分にとって
つらいこと、苦しいことは、
ほかの人にも、
つらいこと、苦しいことである。
それ故に
自分にとって
つらいこと、苦しいことを
ほかの人に味わせてはいけない。

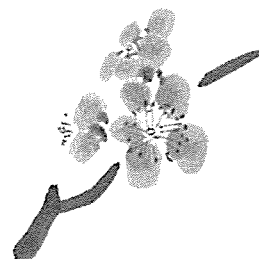
やさしいことであつたら
ファイトは湧きません。
難しいからこそ
挑戦していくのです。
それが自然というものです。

犬は
好きなことや
関心をもったことに興味を示す
好きでないことや
関心をもたないことに見向きもしない。
つまり、
本能のおもむくままに動く。
人間は
嫌いなこと
関心のないことにも取り組む。
人間は
本能を抑えながら耐える。

人が転べば
氷ついた道のせいにする。
氷ついた道でなければ靴のせいにする。
人はなかなか
自分のせいにしないものだ。

世界の人口が約四十六億人、
その中に私がいる。
かけがえのない、
代わりのきかない、
私が現にいる。
わずかしかないから値がはるとしたら
四十六億分の一、
これ以上のものはない。
かけがえのない、
代わりのきかない、
私がここにいる。

人間と動物の違いは、
「笑い」を持つか、持たないかにあります。
動物には、「笑い」はありません。
苦しみにも「笑い」を絶やさず
耐えていけるのは人間だけでしょう。



人間と動物の違いは、
「手」を持っているか、
持っていないかにあります。
動物には手がありません。
人間は手によって確かに
豊かな生活を築いてきましたが、
その反面、恐ろしいものも作ってきました。
その反省にたつて手を合わす、
合掌の世界が生まれたのでしょうか。

人間と動物の違いは、
「言葉」を持っているか、
いないかにあります。
言葉で人を和ませることも出来るし、
また、人を傷つけることもできます。

人間と動物の違いは、
「恥を知る」かどうかによります。
動物には恥を知る思いはありません。
すべて本能のおもむくままに動きまわります。
「恥を知ること」を捨てると
人間でなくなるでしょう。

人間は
ひとつまちがえば
動物になりさがる危険もあるが、
努力によって
人間を超えるものにもなる。
自分をみつめる、
そのことが
人間にふみとどまる
最少の作業といえよう。

人間のみが鏡をもつ。
鏡は己の姿を写すだけでない。
姿は自らのところを現す。
鏡は己のころも写しだす。
鏡を持つ者は人間だけ。

自分に好意をもつ人にも、
自分に悪意をいだく人にも、
すべての人に
思いやりの言葉を語る。
そのことは苦しいことにちがいないが、
まちがいなく、
磨き輝くものとなる道だ

自分に好意をもつ人にも、
自分に悪意をいだく人にも、
すべての人に笑みを絶やさない。
そのことは苦しいことにちがいないが、
まちがいなく
みがき輝くものとなる道だ。

—和顔愛護—

油断した時、怪我をする。
徒然草の高名の木のぼりの話でないが、
ゆれ動く木々の端での作業でより
地面にあと一步のその時に注意せよという。
油断した時、怪我をする。

気を抜いた時、失敗する。
うさぎと亀の
うさぎにならないように。
気をぬいた時、失敗する。

「一生懸命」とは
そぎ落としていくことだと思う。
あれも捨て、これも捨てて
ひとつに一筋。
「一生懸命」とは
そぎ落としていくことだと思う。

怠けているうちに
庭に雑草が入り込んでいた。
その成長の早いこと。
同じことが
怠けている人間に
確実にあてはまる。

花はひとすじに咲く。
その姿を誇ることもなく
卑下することもなく
ただ、ひとすじに咲く。
人もひとすじがいい。

咲き誇っている花にも
散るときがある。
同じように
人にも別れの日がある。
今日は追悼会である。

ネジがゆるむと物はガタつく。
人間も
この道理の
外にない。

美しい花が
咲き乱れているのに、
ぼんやりした者にそれらは見えない。
遠くに雄大な山容が
連なっているのに、
ぼんやりした者にそれらは見えない。
ぼんやりしたものの悲しさ
すばらしいものを
すべて見落としている。

ひと雨くると
木々は生きかえったように見える。
人が生きかえる、
鋭い感性によるといえる。

楽をして得たものは
失いやすく
苦勞して得たものは
手放しがたい。

坂道を登るは苦しく、
坂道を下るは楽しい。
それに似て
「楽し」「楽し」と言っているうちに、
人はどンドンさがっていく。
「苦しい」「苦しい」と言ううちに、
人は、少しずつ目標に近づく。

「慣れ」は恐ろしいことだ。
「慣れ」は、また、すばらしいことだ。
悪いことになれるはおそろしく
よいことになれるはすばらしい。
ただ悪いことになれやすく
よいことになれにくい。
注意が必要だ。

燃えてよい時、燃える
精神、すこぶる正常。
燃えてよくない時、燃える。
精神、ひどく異常。
燃えてよい時、燃える。
それは力となる。

今日に何を残すか
喜びを残すか
悔いを残すか
今日に何を残す

思っているだけでは ダメ
汗を流さなくては。
考えているだけでは ダメ
実行しなければ。
思うこと、考えること
ともに大事なことだけど
そこにとどまっている限り
何も生まれてはこない。

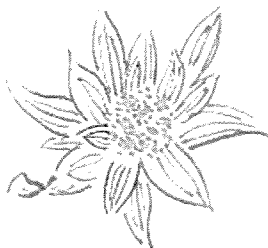
誰も見ていないからといって
どのようなことをしてもよいだろうか。
誰も見ていなくても
ひとり自分だけが自分を見ている。
この事実を忘れてはならない。

人が見ていないから、
なおのこと
自らをきたえることが出来る。
人が見ていると誰でも
形だけはととのえる。
人が見ていないから
自らを試す好機となる。
人が見ていないから、なおのこと
自らをきたえることが出来る。

木には、葉があり、枝があり、
幹があり、根があって、
木を成り立たせている。
人も同じこと。
ひとりで生きれるものでない。
多くの人の支えが必要となる。

機械は無数の部品から成り立っている
そのため小さなネジ一本なくなっても
機械は徐々にこわれていく。
人も同じこと。
ひとりで生きれるものでない。
多くの人の支えあいが必要となる。

種子から
すぐには実にならぬ。
あたりまえのことなのに
人は時として
種子から
すぐに
実となる夢みる。



ころころ変わるから
「ころころ」と呼ぶ
ころころと坂道を
すべり落ちる小石のように
楽な方に「ころころ」は動く。
それ故、
気をつけなければならない。
きびしい練習に
初めから耐えられたのではない。
何度そこから
逃げだそうとしたことか。
そのうちにきびしい練習も
普通となった。

人という文字が示すように
支えあいを根本の形にしています。
それ故、
一人で生きているのではありません。
助けあい、支えあって生きているのです。

人を悲しませて、自分の幸せはない。
人を苦しめて、自分の幸せはない。
要するに、
人を犠牲にして
自分の幸せはないといえる。

口から、挨拶の言葉を、
身体で、会釈の姿を、
心で、敬う思いを
常に心がけていたいことです。

稲の穂の実が稔るほどに、
穂先は大きく垂れさがる。
人もまた
己の姿を
知れば知るほど
頭をさげずにいられない。

春にまいた種子は
秋に収穫された。
自らの行為の結果は、
確実に
自分で受けとらなければならない。

友を失って苦しむもの
代わってくれる人なし
病気で苦しむもの
代わってくれる人なし
いろいろ苦しみ悩むもの
代わってくれる人なし
代わってくれる人のない
この自分を大切にしたい

人を意味する英語 man の語源は
インドの古い言葉 mannsya である。
インドの古い言葉 mannsya は、
「考える」という意味をもつ。
考えることの出来るものを
人と呼ぶ。

近道のもりで迷いこみ
結局大きくまわり道になる。
容易な判断、行動はつつしみたい。

むずかしいもの、苦しいものを
第一にする。
やさしいもの、楽なものを
最後にする。
それを逆にしていると
前進、向上はありえない。
どれを優先順位、
第一に選んでいくかで
おおげさに言って
人生はかわる。

いいわけばかりしていると
いいわけ人間になる。
いずれ
信用されなくなる。
言い逃ればかりしていると
言い逃れ人間になる。
いずれ
無視されていく。

自らなした
すべての行為の結果は、
自らが受けざるを得ない。
この事実
一日でも早く
気づいてほしい。

滑る道には
気をつける。
気をつけていても
ころぶ。
人の歩みも同じこと
道は凍りついていると
心得よ。

希望を失うことは
若さを失うと同じだ。
たとえ七十歳になっても
希望を持ち続ける者は
若者と同じ年齢といえる

合掌は形だけだと
受けとってはなりません。
それは刻々と
こころの姿勢を
ととのえているのです。
あわただしい中に手をあわせる、
心静かな中に
我にかえる。
そのような時を
持つことは
一人一人にとって
大事なことです。

自らのなしたことは、
まわりまわって
自分のところに
やってくる。
その時は、
何とも思わずに
なしていたことでも
やがては
自分を苦しめる。

一日ひとつでもよい
目に着いたゴミを拾おう。
一日ひとことでもよい
他人をなごめる言葉を語ろう。
一日一度でもよい。
他人に迷惑かけまいと誓おう。
行動と言葉と心とに
いつも注意を怠らないことです。

時間はすべての人に
平等に与えられているが、
それを生かす人には
生き甲斐が与えられ、
それを殺す人には、
うつろな日が与えられる

ゴールは、また、スタートだ。
ひとつの戦いの終わったあと、
さらに次の戦いにのぞむ。
あのスポーツの選手達のように
ゴールは、また、スタートだ。





斧の響き 158号 (2022年1月1日発行)
発行・印刷：日本ボーイスカウト北海道連盟／発行責任者：北海道連盟 理事長 三国久介
〒062-0934 札幌市豊平区平岸4条14丁目3-40
北海道ボーイスカウト会館内
Tel 011-823-7121 / Fax 011-814-9377 E-Mail bs-hokkaido@douren.org